
あいつとわたし

亜矢那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいつとわたし

【Nコード】

N7384I

【作者名】

亜矢那

【あらすじ】

主人公はあるひ最愛の彼氏 涼太 を事故で失ってしまう。

涼太には双子の弟 浩太 がいて…主人公は浩太を気にしてしまう

…

1 消えたあいつ

「ばかやろお」

あいつにいった最後の言葉だった。

大好きだったあいつに言った最後の言葉が

「ばかやろお」 なんだ。

あいつの名前は中山涼太。

あたしはあいつが好きだった。

涼太が好きだった。

でも喧嘩した。本当に些細なことだった。

あいつは家を飛び出して行って・・・車にひかれた。
そして・・・

あいつはいなくなってしまった。

大好きだったのに。

こんなすぐにいなくなるなんて思ってもみなかった。

あたしは中村肇。高校一年生だ。

涼太はあたしの同級生で・・・おさななじみで・・・

恋人だった。

いまあたしは泣いている。

どこで？

ある人の胸の中だ。

浩太・・・

涼太の双子の弟だ。

涼太と浩太は双子だ。

だから浩太もあたしの幼馴染だ。

あたしは浩太に抱かれて泣いている。

浮気・・・

そんなんじゃない。

もう悲しみで何も考えられなくて

誰かの近くにいなかったら何をしてしまうかわからない。

だからあたしは浩太のそばにいた。

浩太だってすごいつらいと思う。

泣きたいと思う。

でも涼太が強かったのと同じように浩太も強かった。

だから浩太は泣かない。

最愛の人を失ったあたしは抜け殻のようなものだった。

もう何も無い。

生きている意味も価値も...

2 あたしと涼太

涼太がいなくなってから一週間。

あたしは心にぽっかりと穴があいたような気分だった。

「涼太」

涼太はあたしの一部だったんだな。と思う。

浩太はあいかわらずだ。

表面は元気だけど中ではものすごく悲しんでいるんだと思う。
どうして涼太はいつてしまったのだろう・・・

私のせいだ。

私が…喧嘩したから。

涼太はきちんと前を確認しなくて…

罪悪感がこみあげてくる・・・

学校へ行っても授業は上の空…

そんなあたしに気を使ってみんなは何も聞かなかった。

多分みんな知りたいとおもってるんだと思う…

そんなことを考えていたら

誰かが何か言っているのが聞こえてきた。

「肇… 大丈夫かなあ」

「大丈夫なわけないよ。だって涼太が・・・」

「でもさあ、以外にこの後肇って浩太とつきあいそうじゃん?」

「えゝ・・・」

「そついうのよくあるじゃん?」

「ドラマの中ではね・・・」

浩太とあたしが付き合うなんてありえないだろ…

そう思っ言おうとしたけどやめた。

人生この先、何があるかなんて分かんないんだから。

3 愛子と浩太と・・・

学校に行くのが怖い

そんな思いがあつた。

突然いなくなつた涼太。

私の涼太…

「肇」

だれかがよんでいる。

クラスメートの本山愛子だった。

「え？」

「ちょっと肇っなにぼーっとしてるの？授業終わったよ？
次移動教室っ」

「あっ・・・ごめん。ありがとう。」

「大丈夫？」

「う・・・ん」

「最近肇元気ないよ？でも・・・ね・・・」

「気にしないでっ」

明るくふるまう

「肇って浩太のことどう思う?」
突然聞かれてとまどう

「どう・・・って?」

「あたしさあ、浩太のこと気になってんの。
いままでは肇と涼太が付き合ってたから遠慮してたんだけど・・・」

「別に…普通だよ?」

「ってことはうちが浩太と付き合っても問題ないってわけだ」

「うん。」

愛子…もしかして。

「うちっ浩太に告白する。もう少したってから。」
・・・

「そっか。頑張れ^^」
なんだか複雑な気分。

「まあとりあえず教室でよっ肇も元気出して^o^」

「うん・・・」

愛子って浩太好きだったのか。
気付かなかったな…
でもなんか複雑な気分だ。

なんでだろ・・・

あたしは涼太の恋人であり

これからもずっと変わらないはずなのに...

3 終わり

4 あたしのもやもや

「あたし明日浩太に告白するね」

昨日愛子から聞いた。

別にあたしには関係ない

そう思ってたはずなのになんだかよくわからないもやもやがある。
浩太はあたしの兄弟みたいなものだった。
だから恋愛感情なんて生まれるわけがない。

そう思ってた。

その日愛子は告白した。

答えは…

NOだった。

理由は涼太のことだった。

そんなこと考えられなくて。

・・・ほっ

ほっとする自分がどこかにいた。
なぜだろう。

最近浩太の周りに女子がいるともやもやする。

あたしは涼太の彼女だ。

そう言い聞かせているのに心が言うことを聞かない。

でも別にあたしが浩太のことが好きだろうと関係ない。

浩太は何も思っていないのだから…

でもその数日後にあたしはおもわぬじたいにまきこまれる・・・

5 浩太と一緒に…

あたしはきょう、浩太に呼び出された。
内容は涼太のことだった。

「いっしょに涼太のお墓へ行かないか？」

あたしは当然OKした。

じつはあの日から涼太に会っていないのだ。

浩太もそのようだった。

その週の週末にあたしは浩太と一緒に涼太に会いに行った。

会いに行った帰りに閉店間際のショッピングセンターに滑り込んで
買い物をした。そのあとエレベーターに乗った…

ガコンッ

「なんの音？」

あたしは何となく嫌な予感がした。
予想は的中していた。

「エレベーターが止まったな。」

浩太が言う。

「ウソ……………最悪……………」

「とりあえず緊急だから助けを呼ぼう。」

そう言って浩太はエレベーターの中にある非常用のボタンを押した。
そしてこう言われた…

「復旧に時間がかかるので今晚はこの場所で過ごしていただく
ては

なりません。。。申し訳ございません…」

なんだと？こんな密室で男と二人…
しかも相手は浩太…

「あーあ。最悪だな…」
浩太が言う

「そうだね。。。」「
と言いつつ内心うれしいあたし。

何か起こったらどうしようなんて考えてるあたしって…
あたし最近おかしいかも…

6 浩太があたしに…

「朝までこのまま…か。」

浩太が言う。

「そうだね・・・なにしようか・・・」

ドキドキしながらあたしが言う。

そのとき・・・

グウウウウ・・・

浩太のおなかが鳴った。

「わっわりい・・・まさかこんなことになるとは思ってなくて…その…」

きや~~~~~浩太可愛いっ!!

「いいよ別に。気にしなくて。」

そういいながらあたしはカバンの中から巾着を取り出す。

いつも万一のためお菓子を持ち歩いているんだよね。

食べたいからっていうのもあるんだけど。

「お菓子…たべる？」

聞いてみる

「いいのか？」

浩太…目がきらきらしてるんですけどww

「いいよ」

「よっしゃっつー!!」

そういつて浩太はあたしのお菓子チョコやクッキーを
食べたした。

「でも…お前なんでお菓子なんか持つてるんだよ？」
浩太がむしゃむしゃ食べながら問いかけてきた。

「女の子はね、いつでもお菓子を持つてるんだよ。」
可愛いことを言ってみるあたし。
キャラじゃないのに…

「ふうん…そういうものなのか…。」
って納得してるしw

そついつてお菓子を食べている浩太はとてもかわいくて
あたしは浩太に見とれてた。

「ねえ…。」

「ん？」

「あたし…浩太のこと好きかも…。」

「…えっ？」

いつちゃった…っていうかなんであたしこくってんのよっ

「だつてお前涼太の…」

「ごめん。いまの忘れて…」
顔が真っ赤になる。

「おれでいいなら付き合つよ。」

えっ・・・えっ・・・え~~~~~!!!!
なんでなんで??

「えっ・・・いいの?」

「俺でいいならいくらでも。」

「でも・・・・・・あつ」

いきなり抱き締められた。

「俺だつてお前のこと好きだった。でも涼太がいたから…」

「こっ 浩太?」

そしてあたしは・・・

浩太とキスをした。

柔らかい唇が重なり合つて…溶けていく。

いつまでもこの時間が続けばいいのに…なんて思っているあたし。
浩太と離れるのが…

怖
か
っ
た。

8 悪夢から幸せな日々

気付いたらあたしは眠ってた。

浩太も横で寝てる。

昨日のことは夢じゃなかったのか…とおもうあたし。

でもいいの？

と心の中で誰かが問いかける。

肇は涼太の彼女でこれからもずっとそうじゃないの？ と。

でもあたしはいま浩太の彼女だ。

と誰かが言う。

私の中で2つの気持ちが渦巻いていた。

一つは浩太と付き合えてうれしい

もう一つは涼太を裏切ってるあたしって最悪…。

でもいまはうれしい気持ちのほうが強かった。

あのあとあたしたちは無事に家へ帰れた。

次の日が学校じゃなくて本当によかった。。。

あのことがあってからあたしたちは付き合いだした。

周りからはいろんな目で見られた。

「肇元気になってよかった」というひともいれば

「涼太がいなくなったら浩太かよ」っていうひともいる。

愛子はあたしに近づかなくなった。

まあしかたがないとおもう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7384i/>

あいつとわたし

2010年10月28日07時55分発行